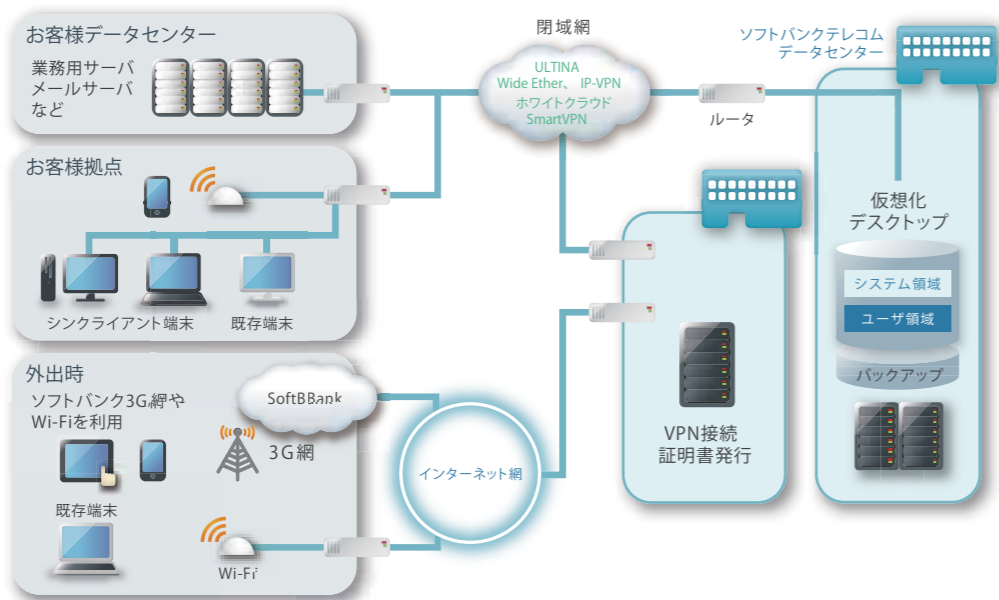


# 「ホワイトクラウド デスクトップサービス」

「ホワイトクラウド デスクトップサービス」は、パソコンにはOSやアプリケーションを搭載せず、作業はソフトバンクテレコムのお客様データセンター内のサーバで行い、ネットワーク経由でデスクトップの画像を配信するシンクライアント型のサービスです。

## サービス概要

ノートパソコン、デスクトップパソコン、「iPhone」、「iPad」などさまざまなデバイスからアクセスが可能のため、時間や場所にとらわれることなく、いつでもどこからでも同じデスクトップ環境を利用することが可能です。



## 特長

- 既存資産の有効活用による安価な価格設定**  
 ソフトバンクグループの持つデータセンターなどの資産の有効活用、社内適用を流用した効率的な運用体制および既存サービスでも用いている調達スキームを活用し、安価な価格設定を実現しています。
- 信頼性の高いネットワーク接続**  
 ソフトバンクテレコムのお客様データセンターとのバックボーンとのダイレクト接続により、閉域性と信頼性を向上した高品質なビジネス環境をご提供いたします。
- 高品質な保守・運用・監視**  
 ISO20000 (ITSMS)、ISO27001 (ISMS)、ISO9001 (QMS) を認証取得したデータセンターで、ハードウェアを24時間365日保守・監視し、高品質な運用を実現しています。
- シンクライアント化によるセキュリティ向上**  
 シンクライアント化により端末側にデータを保存しないため、パソコンの盗難、紛失による情報漏えいリスクが軽減されます。
- ライセンス管理業務の負荷を軽減**  
 仮想デスクトップのOS、アプリケーションをサーバ側で一括管理することが可能です。ライセンス管理業務の負荷軽減、運用管理コストの削減に貢献いたします。



# SoftBank



## 商用化を大前提としたグループ 20,000人のワークスタイル変革 既存の仕組みを変えずにRDP通信を高速化 できたのはEricom Blazeだけでした。

ソフトバンクグループの経営理念「情報革命で人々を幸せに」のもと、IT環境の変革に取り組んでいるソフトバンクテレコム株式会社では、シンクライアント化、スマートデバイスの活用によるワークスタイル改革を進めて来ましたが、さらなる利便性の向上にあたり、仮想デスクトップのRDP通信の性能問題に直面しました。商用化を視野に入れ、最適な解決策を模索し続けていたところ、2011年Ericom Blazeと出会い、既存の仮想デスクトップの仕組みを変えずRDP通信スピードを改善できることを確認。グループ20,000名の仮想デスクトップへの適用とともに、商用サービス「ホワイトクラウド デスクトップサービス」にも採用を決定しました。

課題	対策	効果
<ul style="list-style-type: none"> <li>■ シンクライアントとモバイルデバイスを活用したワークスタイル変革のさらなる進化にはRDPベースの仮想デスクトップの使用感の向上が必須だった</li> <li>■ 低コストで画一的な仮想デスクトップ・サービス提供を可能にするデスクトップ仮想化ソリューションを探したが、マルチテナント対応等の要件を満たす製品が存在しなかった</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ ソリューションを模索し続ける中でRDP通信高速化ツールEricom Blazeを発見。社内環境でテスト導入したところ、ネットワーク利用帯域の削減と、シンクライアントやスマートデバイスからのアクセスにおいて使用感の向上を得られた</li> <li>■ Ericom Blazeは既存の仮想デスクトップの環境を変えずにRDP通信パフォーマンスだけをテコ入れできる唯一無二の製品であった。同社の希望するサービス仕様を満たすことができたため、グループ社員向けの仮想デスクトップ環境と商用サービス向けに採用した</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 先行してEricom Blazeを利用したユーザは、海外出張先からでも快適に仮想デスクトップを利用。場所に縛られないワークスタイルを確立させた</li> <li>■ 仮想デスクトップを利用中のグループ3社 20,000名へのEricom Blaze展開を2013年度中に予定</li> <li>■ 「ホワイトクラウド デスクトップサービス」でもEricom Blazeを利用し、同サービスを技術的にも、コスト的にも競争力あるものにした</li> </ul>

# SoftBank

## ソフトバンクテレコム株式会社

ソフトバンクテレコム株式会社は、ソフトバンク通信6社の中核企業として法人および個人向けに電気通信業務を行う企業で、グループの経営理念は「情報革命で人々を幸せに」です。

本社：東京都港区東新橋1-9-1  
 創業：1984年10月  
 従業員数：約5,400人  
 事業内容：法人向けの固定電話サービスの提供、データ伝送・専用線サービスの提供  
 URL：http://www.softbanktelecom.co.jp/

(取材日：2013年7月)

## POINT

1 RDP通信の性能課題にピンポイントでソリューションを提供

2 計画していた商用サービス仕様にぴったりフィット

3 既存の仮想デスクトップに影響を及ぼすことなく導入可能

## シンクライアント・システムの利用拡大と商用化に向けて残された課題

ソフトバンクグループは「情報革命で人々を幸せに」を経営理念とし、自ら革新的なIT環境を積極的に導入しながら、ワークスタイル変革を推進しています。

その取り組みの1つが「いつでも、どこでも、どのスクリーンからでも業務ができる」ワークスタイルの実践のために、2009年よりシンクライアントやスマートデバイスの導入を促進し、現在では、ソフトバンクグループ内25,000人の社員が自社データセンターの仮想デスクトップにアクセスし、場所やデバイスを選ばず仕事をすることが可能になりました。仮想デスクトップのインフラを作るきっかけとなったのは、2009年、中国大連市に設立したBPOセンターでした。オフショアであっても高いセキュリティを実現するため、シンクライアント・システムを導入したのです。顧客の業務データは国内にあるソフトバンクテレコムのデータセンターに置き、BPOセンターからはシンクライアントで接続するため、業務データは中国側に一切残りません。通信プロトコルにはMicrosoft RDP(Remote Desktop Protocol)を用いきましたが、ネットワーク遅延による画面表示の遅れが発生することがありました。そのため、国際通信回線の敷設方法を考慮したり、回線帯域を拡大するなど、通信事業者ならではの工夫を施して対応しましたが、RDPを利用する以上、できることは限られていました。

情報システム部門がシンクライアント・システムの導入を進める一方で、2008年にソフトバンクモバイルが「iPhone」、「iPad」といったスマートデバイスの取り扱いを開始したことから、ITサービス企画部門は、こうしたデバイスの活用を前提にしたデスクトップ環境のシンクライアント化を真剣に検討し始めました。自社内での運用が実現できれば、革新的なワークスタイルを実現するサービスとしてそのまま商用化する構想でした。しかし、その実現には大きな壁が立ちました。ソフトバンクテレコム株式会社 ITサービス開発本部 サービス推進統括部 サービス推進室 室長 竹内俊雄氏は次のように振り返ります。



**竹内氏** 当時のシンクライアント・ソリューションはまだマルチテナントの発想がなく、導入する企業ごとにシステムを分けて構築する必要がありました。この方法だとどうしてもコストがかかります。興味を示してくださる企業もありましたが、見積もり提出段階で商談がストップしてしまいました。当社としても、顧客企業が増えることに開発が生じたり、運用工数が増大するのは望むところではありませんでした。当社はシステムインテグレータではないので、ここで競って勝負になりません。工数をかけず、標準サービスで提供できる完成度に達していないと、商用化は難しい状況でした。

## RDP通信を高速化する唯一のソリューション Ericom Blazeを選択

その後、企画部門から情報システム部門に異動した竹内氏は、RDP通信の改善方法や商用化条件を満たすシンクライアント・ソリューションを模索し続け、ついに2011年、Ericom Blazeに出会います。日本総代理店を務めるアシストのEricom製品取り扱い開始のプレスリリースがきっかけでした。「RDP通信の高速化」をコンセプトにしたこの製品に興味を持った同氏は、セミナーで製品の性能を見てすぐに「行けそうだ」と直感し、社内シンクライアント環境でEricom Blazeの性能検証に踏み切ります。社内テストでは、Ericom Blazeを組み込んだUSB型シンクライアントの「雲人(くもんちゅ)」や、「iPad」などモバイルデバイス用のBlazeクライアント「Ericom AccessToGo」をモニター60名に配布し、数週間通常業務を行ってもらいました。



(写真左) USB型クライアント「雲人」からBlazeを起動した画面

(写真右) 「iPad」からAccessToGoを起動し、仮想デスクトップにアクセスする画面

モニターからのアンケートの結果、「速い」「見やすい」「画面表示がなめらか」という意見が多く寄せられました。実際にEricom BlazeとRDPのネットワーク・トラフィックの比較では、明らかな帯域抑制効果が見られるとともに(図1)、ネットワーク遅延が大きい海外からのアクセスでも問題なく使える使用感を実現することができました(図2)。

図1 RDP (画面転送プロトコル) のアクセラレータ

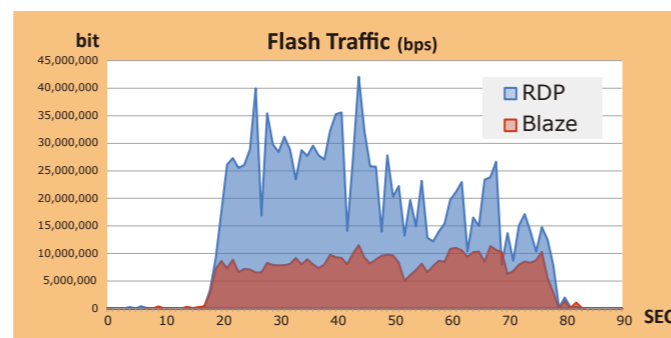


図2 海外とのネットワーク遅延

ロケーション	遅延 (ms)	現状 DaaS <sup>*</sup> 使用感	Blaze 使用感
韓国	40	○	○
中国 (大連)	80	△	○
シンガポール	90	△	○
アメリカ (西)	115	×	○

<sup>\*</sup> RDP 接続

竹内氏自身にもEricom Blazeの効果を体験する出来事がありました。

**竹内氏** 海外からのリモートデスクトップへのアクセスでは、ネットワーク遅延の程度が使用感を大きく左右します。そのため、今までの海外出張ではRDPで遅い仮想デスクトップにアクセスするのは急ぎの承認案件がある時ぐらいで、それ以外はモバイル端末でメールを送受信するぐらいしかできないと割り切っていました。それが私自身が先日アメリカに出張した時のことです。ホテルから「iPad」でEricom Blazeを使うと、ネットワーク遅延が100ミリ秒を超えるアメリカ西海岸からでも日本にいる時と変わらず仮想デスクトップに接続し、違和感なく仕事のできたのです。

Ericom BlazeはRDPの画像データを独自の方法で圧縮することにより、RDP通信を高速化しています。RDPが画像フレームを複数の小さなチャンクに分割、個別にレンダリングしてローカル・ディスプレイに表示するのに対し、Ericom Blazeはクライアント側でこれらのチャンクを統合し、完全な画面フレームを1つのユニットとして表示します。そのため、画面表示が開始されるまでは若干時間がかかるものの、その後はスムーズな表示を維持し、優れたユーザ・エクスペリエンスを実現します。ソフトバンクテレコムが認めたのはまさにこの点でした。

**竹内氏** 今日ではシンクライアント・ソリューションも多様化しているものの、RDPパフォーマンスの改善に特化している製品としてはEricom Blazeが唯一無二の解決策で、その技術も秀逸です。技術的な比較のために他社の通信プロトコルもテストしましたが、仮に採用するとすれば通信プロトコルだけでなく、管理機能を含めたデスクトップ仮想化の仕組みを抜本的に変えなければなりません。一方、Ericom Blazeは、ただ入れるだけで良かったのです。迷いはありませんでした。

## ソフトバンクグループ通信3社20,000名へ導入 2013年度中に移行を完了予定

ソフトバンクテレコムは法人向けのクラウド型シンクライアントサービス「ホワイトクラウド デスクトップサービス」の正式採用には、製品のカスタマイズが必要でしたが、同社、アシスト、Ericom社の三社間でWeb会議を行うなどして調整し、順調に商用化に向けた調整が進みました。ソフトバンクテレコム株式会社 ITサービス開発本部 サービス推進統括部 サービス推進室 竹下和臣氏は、その状況を次のように語ります。



**竹下氏** 認証方式やライセンス体系など当社が希望する仕様を満たし

ていただく必要があったのですが、アシストは営業、技術部門ともにレスポンスが速く、Ericom社ともダイレクトにやりとりができ、かつ柔軟に対応してくれたのももちろん進めやすかったですね。当社の「雲人」やデバイスとしての「iPhone」、「iPad」ともよく調和し、技術的に気に入っていたので、Ericom社の知名度がどうかという点はまったく気にならなかったです。

2013年7月現在、Ericom Blazeはソフトバンクテレコム、ソフトバンクモバイル、ソフトバンク BBのソフトバンクグループ通信3社約20,000名のユーザ環境に適用されることが決定しています。また、クライアントOSが Windows 7 に切り替わるタイミングで環境を移行し、計画では2013年中にこの移行を完了する予定になっています。

それと並行し「ホワイトクラウド デスクトップサービス」を実現する技術の1つとして商用化もスタート。今後、このサービスを採用する企業はもれなくEricom Blazeの性能を享受することになります。ソフトバンクテレコム株式会社 ITサービス開発本部 サービス推進統括部 サービス推進室 佐藤真也氏は、完成したサービスのセールス・ポイントを次のように語ります。



**佐藤氏** Ericom Blazeを導入したことで、RDP通信部分に当社のサービスならではの価値が付加でき、他のクライアント仮想化ソリューションと差別化することができたと思います。また、コスト的にもこの製品自体が安価なため競争力のあるものになり、自信を持ってグローバル・ベースで企業にお勧めすることができます。

デスクトップを仮想化し、スマートデバイスを活用することで、場所を選ばない革新的なワークスタイルが現実のものになると竹内氏は強調します。

**竹内氏** 人が仕事場に縛られなくなります。すでに当社はそうになりました。どこにいても同じ効率で働けるので、どこで仕事をしようがまったく関係ありません。先行利用ユーザである我々の部門では、仕事を進めるスピードも、ワークライフ・バランスも大きく向上しました。このメリットは業種に関係なく享受できるものであり、将来的には100%の企業がそのように動くと確信しています。

ソフトバンクテレコムは、Ericom Blazeの導入により仮想デスクトップの仕組みをさらに進化させ、自らが先駆者となり、ワークスタイルの変化がもたらす場所に依存しない理想の働き方を世の中に伝え始めました。